

人と人とのつながりが 災害からまちを守り復興する力に

震災後の復興まちづくりを 目の当たりにし研究者の道へ

1995年1月17日の阪神・淡路大震災の後、私は神戸大学の大学院生として復興のまちづくりが進んでいく様子を目の当たりにしました。震災後2か月ほどで震災復興の都市計画事業として、再開発事業に指定された神戸市灘区の六甲道駅南地区。私はここで、地域の方々の思いを調査する活動をお手伝いし、避難所で被災者の皆さんからお話を伺うことになりました。

「まちづくり協議会」に毎日出席して感じたことは、皆、自分の家の事情は差し置いて、まちのため、皆のために動いておられたことへの尊敬の念です。行政からの提案についても反発ばかりではなく取り入れもしながら、自分たちのまちを良くするよう見直しを進めていきました。住民相互の価値観の違いの調整も含め、気の遠くなるような作業……。それだけに、困難を乗り越えたときの皆さんの喜び、達成感、安堵感は、そばで見ている

現代社会学部

伊藤 亜都子
教授

ても感動的でした。

神戸のまちは、私の研究領域である「まちづくり」との出会いの場所です。「まちづくりの主役は、あくまでもそこで生活する住民である」という原点を身をもって教えてくれ、研究者としての道を指し示してくれました。

フィールドワークで体感する 地域のつながり

現在の研究テーマは、「防災とコミュニティ」です。災害被害に立ち向かう地域社会の姿は、災害が起こる前の日常社会と非常に深い関係があります。日常の地域社会に人と人とのつながりがあり活性化が図られていることで、被害が軽減され復興にも役立つと考えられます。平時に地域がどうあるべきかを考え災害時に弱い部分を強化することは福祉にもつながり、いろんな立場の人が暮らしやすくなるでしょう。

こうした地域のつながりを学生に感じてもらうと、フィールドワークとして商店街によく出かけています。神戸市灘区の水道筋商店街では、市場でのやりとりなどを体験し商店街を楽しむことで、地域を身近に感じられるようになってきています。また六甲道駅南地区では、防災マップづくりや若いお母さんたちへの聞き取り調査と発表を行いました。フィールドワークを通して、まず自分の住んでいる地域に関心を持つてほしい。将来は、地域で防災の知識を活かすのはもちろん、コミュニティの一員として「まちに関わったほうが面白い」、「人生が豊かになる」と感じてほしいと願っています。

まちなかと地方、 人と人との連携強化を

防災を学ぶときに一番大事なものは、自分と関わりのあることとして捉えられるようになることです。本学と神戸市との連携イベント「KOBECODOMO大学「防災の日特別企画」で行った親子向けの防災講座では、「非常持ち出し袋」を作ったり、各家庭の防災計画を立てたりするワークショップを実施しました。学生たちにも手伝ってもらい、防災教育の大切さや防災に対する市民感覚を知ってもらいました。

今後は、今まで見てきた「まちなか」の防災から、もつと地方都市に目を向けたり、まちなかと地方をつなぐことなど、研究テーマを広げていこうと考えています。「地域」と言うとき、その範囲はお互いに顔を知っている人がいるところぐらいまでの広さを指しましたが、人口が減り社会が変わっていく中で、地域だけではまかないきれない部分も出てきています。そんな状況で、まちなかと地方、人と人との連携をつくっていくにはどうしたらいいかといった課題にも取り組んでいきたいと考えています。



グランフロント大阪で防災ワークショップを開催



■法学部 ■経済学部 ■経営学部
■文学部 ■現代社会学部
■グローバル・コミュニケーション学部
■総合リハビリテーション学部
■栄養学部 ■薬学部 ■大学院

●ポートアイランドキャンパス ●有瀬キャンパス

夢へのチャレンジが、未来を創る



神戸学院大学

神戸市中央区港島1-1-3 078-974-1551(代表)